



不思議な 紫水晶



麵 平良

英雄になりたい

田中一郎という少年がいた。都内一の進学校に通っており、成績は優秀、家の経済状況も比較的豊かである。

彼の夢は、この国の官僚になる事であり、そのためにまず東京大学を目指していた。

彼はこの国の現状を憂っていた。続く不景気、待機児童、差別や貧困・・・自分が指導者となり、この国を良い方向へ導かなければ・・・そんな使命感に燃えていた。

日々予備校に通い、家では机に向かって勉強に励んでいる、そんな彼には最近気になっている事がある。

彼の部屋は自宅の二階にあるのだが、その部屋の窓からは隣の家の窓が見える。そして、その部屋にいつも居て、窓から外を眺める少女・・・彼女は常にベッドの上にいる。どうやら体が弱いらしい。

数メートル先に居ても、彼女が大そう美しいのが分かった。一郎は密かに彼女の姿を見るのを楽しみにしており、彼女の存在がますます勉強への励みになった。

ある日、いつものように窓を覗くと、彼女が居ない。ふと目を逸らすと玄関のあたりに居て、これから出かけるようだった。

「恋人とデートだろうか？」

不安になった一郎は、勉強を放り出して後を追った。

彼女は近くの公園に着くと、ベンチに座り、一時間程そのままであった。

「誰かと待ち合わせでもしているのだろうか？」

と一郎は思ったが、結局誰も彼女に近づく者は無く、彼女は一人で帰宅した。

どうやら天候が良く、たまに具合の良い時に散歩をする事があるらしい。

数日後、公園のベンチに座る彼女に、一郎は声をかけた。

見知らぬ男性に声をかけられ、驚きと若干の恐怖入り混じる表情を向けたが、近所に住んでいる事や、たまたま見かけて声をかけただけ等と一郎が上手く説明したので、歳が近い事もありすぐに打ち解ける様子を見せた。

彼女の名は橘今日子。原因不明の病で数年前から床に伏せっているという。

近くで見る今日子は、遠くから見た以上に美しい。あまり外出しないためか、色がとても白く、黒く長い髪は艶やかだった。また性格やししゃべり方も穏やかで上品でもあり、一郎にとって理想的な女性に思えた。

しかしその夜の夕食時、一郎の母がこんな話をした。

「あんた今日、隣のお嬢さんと会ってたね。あの娘には優しくしてあげなさいよ。今日子さん、病気でもう余命幾ばくも無いのよ・・・」

気付くと一郎は屋台の並ぶ、今まで来た事の無い場所に居た。母から今日子の事を聞き、ショックで思わず家を飛び出し、走り着いた先だった。

周囲を歩く人も、店の人間も、屋台も日本のものには見えず、中東か東南アジアのような風景だ。

一郎はふらふらと歩いた。屋台に何が売っているのか、人々がどんな顔をしているのか、熱に浮かされたような彼の目には全く入っていない。

しかしどういふ訳か、手のひらに収まる大きさの紫の水晶、それ一点に目を惹かれた。その粗削りな水晶に吸い寄せられるようにして、彼は屋台に近づく。

水晶に見入っていると、前方から鈴のような声がした。

「いらっしゃい、お客さん。ここに来たって事は、叶えたい願いがああるみたいだね。」

顔を上げると、その声の主はこの屋台の店主らしく控えている。

黒い髪を垂らし、オリーブ色の肌、くりくりとした目、歳はおそらく13, 4だが妙に大人びた印象を受ける、息を呑む程の美しい少女だ。インドの女性が着ているような、サリーに似た服を着ている。

「この水晶はね」と言いながら、少女はあの紫水晶を手を取った。

「気に入った人間の願いを、何でもきいてくれる。そしてどうやらこいつは、あんたの事を気に入ったらしい。」

少女は水晶を一郎に握らせた。

「あげるよ。でもね、願いを叶えるためにはある程度の代償を必要とするから、そのあたり覚悟してね。」

気付くと一郎は、自宅の前に一人で突っ立っていた。右手には、あの紫水晶が・・・あれは夢ではなかったのか？

今日子は見る見る回復していった。学校にも通うようになり、一郎と会う時も増え、二人は恋人同士になった。

一郎が受験生である事から、デートらしいデートはあまりできないが、今日子は自宅の窓からいつも、健康になった事で晴れやかになった笑顔で手を振り、励ましてくれている。

ところがある朝、起きると体に力が入らない。起き上がるのもやっとで、鏡を見てあまりの衰れ

具合に驚愕した。一郎の体の衰えは日々悪化し、彼は寝込むようになった。

「一郎、今日さんが来てくださったわよ。」

母の声だ。同時に心配そうな顔をした今日子が入って来た。

「一郎さん、大丈夫？」

「・・・ああ。」

一郎が寝込むようになってから、今日子は毎日のように見舞いに来てくれた。体が弱っている時程、人は心細くなるもので、一郎は今日子の気遣いが素直に嬉しかった。

しかし病院で検査を受けても、原因は不明だった。一体何が起きているんだ？ふと目をやった先に、あの紫水晶が。

ひょっとして・・・そう言えば、屋台の少女は願いを叶えるためには代償が必要と言っていた。今日子の病を治す代償に、僕の命を？！

だとすれば、この石を壊したりすれば、僕は助かるのか？しかしそうなれば今日子は・・・

今日子が生き続けたところで、どうせ大した事はできない。せいぜい子供を数名産む程度・・・でも僕は違う！官僚になり、この国を救い、何万人もの人々を救う使命がある。その使命のためなら、たった一人の命くらい・・・

水晶を床に叩きつけると、あっけなく粉々になった。その瞬間から急に体の具合が良くなり、あつという間に元の健康体に戻っていた。

恐る恐る今日子に電話したが、出る気配が無い。そして次の日、今日子の家は彼女のお通夜であった。さっきまでとても元気だったのが、急に倒れて即死したとの事だった。

一郎は東京大学に合格し、数年後官僚への就職も決まった。嬉々として帰宅した日、ちょうど自宅の前で今日子の両親と鉢合わせた。

やつれた様子の両親は、それでも無理に愛想を作り、軽く頭を下げた。一郎も軽く会釈し、玄関を開けながら実家を、この土地を、今日子の両親からできるだけ遠く離れようと決意した。

(就職した事だし、実家を出て自立しなきゃな) そう言い聞かせながら。

新しく住み始めたマンションで、一郎は毎晩、今日子の夢を見てはうなされていた。夢の中で彼女はひたすら、力の無い声で「人殺し」「卑怯者」「偽善者」等と自分を責める。うなされては飛び起きるの繰り返しで、全くと言っていい程眠れぬ日々が続いた。

「田中君、もう帰ってくれ。そんな調子では居てもらっても迷惑なんだ。」

という上司の声に顔を上げると、そこには上司ではなく彼女がいた。毎晩夢に出る、死人のよう

な青白い肌の今日子が。

叫び声をあげながら、一郎は外に躍り出て、そのままどこかの橋から落っこちてしまった。その日はたまたま、大雨の後で川の流れが異常に急であった。一郎は次の日、水死体で発見された。

最近目立った事も無く、また一郎の死に方は真っ昼間にそこそこ派手なものだったので、新聞に小さくではあるが、載った。

その記事を指して、人々はこう噂する。

「また官僚が自殺かあー」「やっぱ、激務なのかねえ？」